

メッセージアウトライン ガラテヤ 4：8~11「どうして再び」

ガラテヤは今のトルコの中南部に当たる地方で、パウロとバルナバが第一次伝道旅行の時、そこで開拓し設立した諸教会がガラテヤの教会である。当然のこととして彼らはユダヤ人ではなく、異教徒であり、異教の神々を拝んでいた。

しかし、彼らが神であると思っていたのは実は神ではなく、人間が作り上げた偶像に過ぎなかったのである。 イヤ44:9~18,46:5~7,エレミヤ10:1~5

まことの神はこのような偶像を拝むことを禁じておられる。 出エジプト20:3~6

ガラテヤの人々はかつてはこのような本来は神でない神々の奴隷であった。(8) 彼らはパウロが言うように、「無力、無価値の幼稚な教え」(9)の中にあつた。しかし、彼らはパウロの伝道によって本当の福音を聞き、まことの神、まことの救い主を知った。彼らは今では神を知っている。パウロはさらに「いや、むしろ知られているのに」と言う。彼らが神を知り、信じたのは偶然ではなく、神の主権的な恵みによる選びがあつたからであり、今や彼らは神の前におぼえられ義と認められているのである。ところがなんと彼らは、「あの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうと」していた。なぜそうなつたのか。考えられる理由は、

神の救いのすばらしさが本当の意味でよくわかっていなかったのではないか。

信仰ではなく、この世的な考えや知恵によって生きようとするからではないか。

「信仰」+「行ない」=「救い」はこの世の知恵から出ている。

「あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています」(10)

これはユダヤ教の教えの中にある安息日、断食日、新月の祭り、過越の祭りや異教の教えの中のさまざまな日、月、年に関するしきたりのことを言っているのだろう。しかし、今までガラテヤ書で教えられてきたとおり、それらの教えや戒めをいくら守っても、それによつては救われぬ。律法の役目は人をキリストのもとへ連れていくための養育係であつた。(3:24) キリストにこそ真の救いがある。キリストが来られたのにどうして養育係のところに戻っていく必要があるのか。パウロにとっては不可解千万であつたことだろう。

「あなたがたのために私の労したことは、むだだつたのではないか、と私はあなたがたのことを案じています」(11)

ここにはパウロの愛の訴えがにじみ出ている。パウロの悲しみは、ただ彼だけにとどまらず、キリストの悲しみであり、神の悲しみである。

ガラテヤ人だけでなく、私たちも神の救いの恵みから落ち、この世の幼稚な教えに逆戻りするとき、誰よりも一番悲しまれるのはキリストであり神である。イエス・キリストにある者は、神に知られ、神によつて召されていることを忘れてはならない。いつも神の愛と交わりのうちにとどまらう。